JART企画

Solution Conference

Diversityから「チーム医療」を考える
座長集約

山形県立中央病院　佐藤 晴美
公益財団法人 星総合病院　続橋 順市
社会医療法人将道会 総合南東北病院　太田 運良
新潟市民病院　風間 清子

【はじめに】

Solution Conferenceとは「大規模な会議で問題解決をする」ことです。

診療放射線技師の現場では、医師の業務の「タスクシフト/シェア」、働く環境の整備、個々の技師のスキルアップ、モチベーションの維持と向上、働く満足度を高めることが急務です。

これまで、Solution Conferenceでは［システムコントロール］、［ワークフローコントロール］、[Woman Serendipity]それぞれのテーマで発表されておりました。それぞれの視点から、一つのテーマ【Diversityから「チーム医療」を考える】について考えて、提案発表していただけると一層、会員の理解が深まると考えます。

［システムコントロール]では、医師の業務の「タスクシフト」について。［ワークフローコントロール]では、働く環境の整備について。[Woman Serendipity]では、女性技師という対象を越えて、放射線技師全体のこととして、スキルアップ、モチベーションの維持向上について3つの視点から考え、【Diversityから「チーム医療」を考える】を探りました。

【東北・新潟地域におけるタスクシフト/シェアの進捗状況についてのアンケート調査報告】

公益財団法人 星総合病院　続橋順市

東北6県と新潟県を対象に、タスクシフトの進捗を詳細なアンケートを基に発表されました。現状では、告示研修修了者が増えたが、告示研修項目にある医療行為のタスクシフト/シェアは、思いのほか進んでいないことが浮き彫りになった。タスクシフト/シェアを推進するには、組織全体で取組む必要があり、トップの判断が重要である。人員の適切な配置や効率化が得られなければタスクシフト/シェアとは言えず、その意義を理解して進めていく必要がある。統一講習会や告示研修内容だけがタ スクシフト/シェアに繋がるとは限らず、各施設運用に合った内容を他職種と連携して構築していくのも一つの方法と考えられる。

「チーム医療」としてとらえれば、それぞれの施設で垣根を越えて、自分たちが患者のために何ができるのかを考えることが重要な要素であることを感じた。

その施設にあったタスクシフト/シェアとチーム医療の考え方が重要である。

【当院における診療放射線技師の労働スタイルと働く環境】

社会医療法人将道会 総合南東北病院　太田運良

診療放射線技師の労働スタイルは、患者さんにかかわる時間が短いが誰よりも先に画像所見を見ることができる。診療に貢献しながらも、チーム医療には診療放射線技師が出てこない（全日本病院協会HP チーム医療）。

チーム医療として診療に貢献するには、診療放射線技師として知りえた画像情報「追加撮影や追加検査の提案、所見の報告など」が臆することなくできるよう、病院の中でコンセンサスをとり、体制を整えることが大切である。また、診療放射線技師の労働スタイルを整えるためにも、スタッフの生活環境や状況にも配慮が必要であり、スタッフ間のコミュニケーションが大切である。

働き方改革、効率化、AI導入、自動化が進みより「ドライな労働環境」になっていくと思われるが、これまで以上に、人間的に熱意や温かみをもって人と接することが求められる。

「人を大事にする診療放射線技師が必要」である。

【「あなたはどう生きるか/働くか」】

Woman Serendipityの活動を通して伝えること

新潟市民病院　風間清子

「あなたの持っている情報や経験や知恵が、誰かの役に立つかもしれない」をコンセプトに、ワークライフバランスを多方面から考えてきた。ワークライフバランスは、ライフステージにより変化し、働き

方、生き方さえも変わっていく。特に、女性が男性よりも影響を受け易かった。しかし、社会の制度が変わり男性の育児休業も必然となった今日、これまでの女性の経験が貴重な情報の宝庫であり、共有することが大切であろう。

働くことだけが生きることではなく、生きるために、どう働き、どう遊び、家族との時間や個の時間をどう使うのか? を考えることが必要であう。また、診療放射線技師として働き続けるには、責任をもって仕事に臨むことと、スキルアップは必須である。そのためには、職場の外の社会とのつながりは、視野が広くなるし、困った時の助けや切磋琢磨でき、自分ひとりじゃないと思える重要なつながりが必要です。

自分のライフステーシに合わせた生き方を見つけてください。「生き方に正解はありません。」

会場の日本診療放射線技師会　上田会長より

「チーム医療」に診療放射線技師も関わることは重要事項であります。告示研修で、タスクシフト/シェアの推進も進められているところですが、現場ではなかなか進んでいない状況がわかりました。

「チーム医療推進協議会」代表を日本診療放射線技師会が務めており、日本看護協会会長はじめ、多くの医療団体と協議を進めているところである。医療関係者の賃金引上げなど国民の医療を守るため人材の確保は重要な課題であること。医療DXを実現し、業務改善をすすめることを協議会で確認しており、厚生労働省に提案することとしています。

【最後に】

「チーム医療」は、その施設の状況に応じて、職種の壁を越えて取り組むことから始めるのが重要であると言える。

そのためには、所属長と、個々の診療放射線技師のワークライフバランスの調整、働く環境改善、スキルアップなどに取り組むことが必要である。